

(清泉女学院小学校昭和 30 年 3 月卒) 会食後の卓話 (平成 23 年 10 月 12 日於横浜)

この昼食会は古希の人間が集まっており、その中で、まだ何がしかの仕事をしている人間は珍しいから、鞭を打つと老骨がどうなるのか話せというお誘いが幹事の M さんからありました。

ところで、わたくしが何者であるかをご存知の方ばかりではないと思いますので、自己紹介を兼ねて、若干の昔話をさせてください。わたくしは、清泉女学院小学校男子部なるものに一年から居りましたが、横須賀は二年までで、三年、四年の二年間は、鎌倉分校で、五年、六年の二年間は、また、横須賀に通いました。わたくしと同じ経歴を辿ったのは、ここにいる T さんがそうで、ほかにも、何人かいるわけですが、全体としては、そう多くはないし、特に、五年から横須賀に通わずに、別な選択をした人たちも半分近くいたように思います。三年のときに横須賀に通うのを止めたのは男の子だけでなく女の子もいて、その方が数は多かったのですが、女の子たちの方は鎌倉にそのまま六年を卒えるまでいたのではないのでしょうか。まあ、この辺の背後の事情は、いくらかは聞いたことがあるように思いますが、子どもには所詮わからない話だったとしか申せません。もっとも、狭い世間のことで、鎌倉の分校で一緒だったけれど、その後は別の学校に移ったという人たちとは、後に、中学から大学までの間に会ったり、あるいは、社会に出てから遭遇したりということがありました。そのうちの何人かはすでに亡くなっています。何年か前に癌で亡くなった Y さんの追想を記したものが、かれとわたくしの共通の友人のサイトに載せられており、そこには、鎌倉の時代のことがいくらか書いてあります。ちなみに、この記事はグーグルで、わたくしの名前で検索すると、割と早く見つかります。

実は、グーグルで最初に見つかる記事は、やはり同じ友人のサイトにありますが、現職、つまり、久留米大学附設高等学校・中学校、以下では、附設と略しますが、その校長職に就いてから半年近く経ったときに報告した記事です。もっとも内容は、わたくしの長年の持論が展開してあるだけで、現職の具体的なことに触れているわけではありません。

とまれ、わたくしは清泉の後、田浦にあった栄光学園で六年過ごし、それから、東京大学に行き、修士課程を修えたところで、一応、数学研究のためにフランスに行き、寮の食堂の安いワインばかり飲んで過ごし、帰国後、北海道大学に行き、ここで 15 年近く過ごしました。この間、一年、パデュー大学に行きました。フランス滞在時の人脈によるもので、自慢にはならないことではあります。とにかく、昨年のノーベル賞の根岸先生がおられるところですし、また、われわれとの関係では、I さんがいるはずです。I さんは、わたくしたちがウェスト・ラフィエットにいた時期もパデューにいたのではないかと思います。日本人会の集まりでは出会わなかったように思います。帰国してから一年後だったか、福

岡の九州大学に移りました。カルチャー・ショックは、東京からパリに行ったときが一番大きく、札幌からウェスト・ラファイエットとは意外なほどなく、他方、札幌から福岡に移ったときは、結構、覚えたものです。この辺りのことは、実は、わたくしのホームページに記事として載せてあります。もともとは、この春、さる中学受験情報誌のインタビューを受けることになったときに、下書きとして用意しておいた原稿記事ですが、半生がどうか言ってきたものですから、インタビューの際の予行になればというつもりで書いておいたものです。ただ、大分記憶違いがあったみたいではあります。

ともかく、九大時代の種々の雑事に伴う会議でいろいろな知り合いができました。その中に、久留米附設、つまり、今の勤務先の学校の出身者で、後に、九大を定年後にそこの校長になった人がいました。この場だから申し上げますが、かなり、権威主義的な人だったようで、自分の後任としてつてを頼って探し出した人は、福岡県立高校でも、黒田藩の藩校にまで遡る歴史と言い、卒業生の各界での活躍振りと言い、評判でも実績でも全国的にも有数の高校の校長を務めたという人でした。福岡県の公立高校界のトップクラスの人材も、しかし、私立と公立の違いとか、まあ、その他、もろもろのことがあって、病気になってしまいました。かくて、急に、校長に欠員が生じてしまうことになったときに、たまたま年賀状か何かでわたくしのことを思い出したという次第でしょう。今から思うと、おかしいくらい持ってまわった仕方、ご相談したいことがありますとの由で、この元校長氏のかつての行きつけの喫茶店に呼び出され、君、校長になりませんか、と切り出されたときには、正直のところ、啞然としました。全く知らない、縁もゆかりもない学校だし、わたくし如きに校長を務まるのか、という思いはありましたが、そのときは、すでに年金生活に入って一二年経っていましたから、浪人しているよりいいか、と思い、お引き受けを致しました。そんなわけで、大変申し訳ないことながら、積極的な思い入れがあつて校長になったわけではないのです。

ところで、この元校長氏から、この学校は英才教育をするところであり、エリートを養成するところであることを肝に銘じておくように言われました。それが具体的にどういうことであるかは不明だったのですが、勉強さえ出来れば何をやってもいいと思込んでいるような、そういう生徒が多い学校という風評をわたくしが耳にしたことがなかったとは言えないと思います。実際、家内から、あなたの信念と違うみたいだけど大丈夫なの、と心配されました。風評というものは一度流れてしまふとなかなか打ち消しがたく、また、年端も行かない子どもたちがどこかで自分に甘くなってしまう原因にもなります。とまれ、卒業生でもある元校長氏がそう仰っているのであれば、最初からそういう学校であったかどうかはわかりませんが、少なくとも先生は本気でそう信じて学校を運営して来られたようです。ただ、先生が学ばれた時期からの時間の経過の大きさというものがあり、校長としては相当に浮き上がっていたのではなかったかと想像される面があります。そのせいか、

この方は在任当時の附設という学校が本当はお好きではなかったのではないかと、思いあたる点も多々あったのです。わたくしへの声の掛け方も、やむを得なかった点があったにせよ、かなりいい加減でした。そして、久留米大学八十周年事業の一環として、元校長氏提案の附設の校舎建て替えの話が進んでいたのですが、そのことは、赴任直前に紹介された附設の同窓会長が持参していた図面で始めて知りました。建築計画の管理は何にせよ大変ですから、本気でしまったと思ったくらいです。新年度早々から建物計画の具体化が始まるということでしたので、すでに相当進んでいて楽なのかなと期待したのですが、実は、この建築案が使いものにならなかったのです。結局、わたくしの校長赴任後の最初の仕事が建築計画の精査と再検討になりました。この手の作業というものは、校長というか、要するにヘッドが全体を把握しながら行わなければならないことだということがよくわかりましたが、それこそ老骨の、しかも、素人には、はなはだ気遣いの大きい作業でありました。結果として、校舎自体は相当にわたくしの好みが反映するものになってしまいました。不具合についても当然わたくしの責任ということになります。

いずれにせよ、赴任直後に、たまたま久留米大学八十周年行事などを通じて、多くの附設の卒業生にお目に掛かることができた上に、赴任直後の生徒会のインタビューで出会った生徒たちが実に素晴らしかったのです。かれらがきちんとした自我が確立しており、しっかりとした価値観のもとで振舞える連中であることがわかり、こういう連中のために、文字通りの微力ですが多少は役立ちたいと思いました。まず、学校を知ることが先で、学校のあり方や運営方針など、元校長氏が言い残されたことは全部忘れることだと腹を括りました。振り返ってみると、妙な意気込みがなかったこともあり、非常に早く学校を気に入ることができたので、いろいろと不愉快なこともありましたが、それはわたくしにとって問題にはならなかったのだと思います。

この場で、わたくしが理解する範囲に限っても、この学校の歴史を述べるのは余り適当ではないのですが、昭和 25 年に高等学校として開校、最初の卒業生が昭和昭和 28 年春に出ています。元校長氏は昭和 29 年卒で、同級生には文化功労者になられた方が二人います。特に、そのうちのお一人には九大時代ずいぶん世話になりました。さて、その後、昭和 44 年に中学を設け、現在は、中学の定員が一学年 150 名、高校は 1 学年 200 名、つまり、高校段階で新たに 50 名募集します。元校長氏のとくに高校募集の分だけが男女共学になりましたが、中学は男子募集のみです。しかし、再来年から、中学も共学化することにしております。この間の事情は、首都圏ではなかなか想像がつかない点があるかと思いますが、人口減や地方の疲弊という現象と戦っていくためでもあります。

この再来年の春というのは新校舎が完成して供用開始になる時期だからですが、わたくしの任期もこの平成 25 年度が最後になるので、いい後任をそろそろ探し始めなければならな

いと思っています。要するに、校長は代替わりします。学校は校長の一人ひとりより長く、かつ、一貫した価値を生徒に伝えつつ、存在し続けなければなりません。それは一体何なのか、そして、それがわかる人が校長を務めていなければ学校は漂流してしまいます。

いずれにせよ、わたくしが校長になったときには、この学校について大事なことはほとんど知らなかったのですが、実際に、同窓生と会い、歴史を調べていくうちに、卒業生たちが非常に堅実な活動をしていることがわかってきました。後ほど紹介しますが、建学の趣旨やら校訓やらが醸し出すものが実は大事だなと思います。久留米大学はもともと医科大学ですし、最初の校長であった板垣政参先生は医学者でもありましたので、卒業生の三分の一前後が医師になっていますが、もちろん、エリートとか英才とかとは余り関係はありません。九州には、ラサールという学校がありますが、こちらの方が、エリートの輩出という点では、附設を上回っているだろうと思います。いずれにせよ、附設の卒業生の大半は、医師を含め、社会の中堅として、地道な活動をしています。実際、社会的影響力の大きい附設の関係者は決して多いとは言えず、6ヶ月在籍した後にアメリカに行ったIT業界の雄S氏は別格として、古い卒業生である高名なジャーナリストのT氏くらいでしょうか。いろいろと物議を醸したH氏、あるいは弁護士タレントのM氏も附設の出身ですが、社会の色物的存在に過ぎないかも知れません。

附設型人材としての理想に近いのは、将来のノーベル賞も期待されるU氏でしょうか。U氏は体内時計の仕組みの解明や制御する原因物質の特定に肉薄しています。そして、生徒には、歌会始に入選したK1君のような、感性豊かな子がいます。実際、K1君の驥尾に付して、わたくしは皇居松の間にも入りました。他にも（もともと、灘や筑駒にはごろごろといるようですが）国際数学オリンピックで金賞を二年連続してとったK2君だとか。

さて、最後に、附設の建学の趣旨を申し上げますと、「国家・社会に貢献しようとする為他の気概をもった誠実、努力の人材を育成する」というのですが、「為他」という語が加わったのは、中学を創設されたときの校長である原巳冬先生の敷衍によるものです。この方は、青年時代に相当悩まれて、聖書を読み、仏典に学んで、結局、禅に傾倒されたとのことで、この「為他」という語は、道元禅師の「正法眼蔵」にあります。しかし、むしろ、素直に字面で捉えたほうがいいように思います。人は何故生きているのか、そういう問へのヒントになる深い言葉だと思います。その他に、校訓校是としては、論語からとった句、「和而不同」であるとか、あるいは、「自主自律」、「立志・克己・誠意」といったこの学校でも掲げられているようなものがあります。わたくし自身は、自分をさし措いて (in spite of myself)、「為他の気概」を強調するようになってはいます。先ほど、校長は代替わりするけれど、学校の伝えるべき価値は永続的でなければならないと申しましたが、「為他の気概を持つ」と唱えることが第一であり、そのもとで人が育つので、そういう人たちを、もし、

そう呼びたいのなら，エリートとか英才とか呼んだらいいと，わたくしは考えています．

散漫な話になりましたが，これは認知症のケのせいかも知れません．お互いに気をつけて参りたいと存じます．どうもありがとうございました．

付記： 話の後で，「為他」とは，（カトリックの学校で言う）**Men for others** あるいは **Women for others** （～献身，ただし，対象は「神」とは限定されないが）と同じように思っているのか，と聞かれた．文脈は異なるが，共通するものはあると考えていると回答した．